

【展覧会に寄せて】

「天地が無用」

恥ずかしい話ですが、私は「天地無用」とは上も下もないものだと、結構な大人になるまで信じていました。もちろんご承知の通り事実は全く逆で「ひっくり返すな」という意味ですが、こんな間違いを犯してしまうのも、もしかしたらこの4文字熟語の佇まいが上も下もないような顔をしているのではないかとも思います。對木裕里の作品にしばしば現れるじゃがいもも、土から芽を出す時には「天地無用」だけれど、空中にある時は上も下もない物体かもしれません。

この見かけのキャラクターとは正反対の本質、あるいは異なる解釈が、思いもよらないところから顔を見せる性質は對木裕里の作品にもうかがうことができるでしょう。それは空間に描かれたドローイングのようなものに見えます。そしてそれは手で作られたものです。近年よく見かけるいわゆる既製品を使用した表現ではありません。それは決して巧みに無駄なく表現されたものではなく、むしろ作るのが嫌いなのではないかと思えるような佇まいをしています。実はそのめんどくさそうな手つきが、見ている私たちの視線とシンクロし、時には拮抗しながら独特な時間を作り出しているのではないのでしょうか。

手でかたちを作る、ということは面倒な手順を強いられることでもあり、また時間もかかります。彫刻家はよく「素材と対峙する」ということを言いますが、実はそれは惰性で物を作っていることの免罪符にもなるのではないのでしょうか。むしろ作業に飽きてしまうことを受け入れ、ドロップアウトして道草を食うことが、この呪縛の中から新しいものを見つける方法につながるかもしれません。この新しく現れるものを掬い取ろうという動きが、実は對木のめんどくさそうな手つきに現れているのではないかとも思えます。ドローイング的なイメージから始まりつつも、途中から制作プロセスや作品の構成原理が優位に立って主張し始める。その適度な逸脱から生まれる複雑さが、一見単純にできているような對木裕里の作品あるいはインスタレーションに現れています。それはもしかしたら彫刻と呼ぶよりも、彫刻を見出す「場」と言った方が当てはまるかもしれません。

では、ごゆっくり、對木裕里の展覧会をお楽しみください。